

自然観察会における「自然とは？」のワーク「自然と自然でないもの」の区別が無意識に誰でもできる！ー

渡辺隆一： キーワード：自然観察会、自然とは、人類史、

自然観察会では多様な自然物の解説がおこなわれるが、前提となる「自然とは」の説明は極めて難しい。そこで参加者に周囲を見回して自然か自然でないかを識別してもらうワークをすることで誰もが無意識に「自然」を峻別できていることを体験で理解することができる。手順は以下のようである。①参加者に「自然とは」を説明できますか、と問い表現しにくいことを自覚する。②「まわりを一回り見回してください」と言い実施してもらう、どこでも 20 秒ほどで終わる。③次に、「自然か自然でないかを区別しながら見回してください」と言い実施してもらう、やや時間かかるが 1 分はかからない。④順次、参加者に見たもので「自然なものは」、次の人に「自然でないものは」と問い、「前の人と同じ答えはなし」と指示して全員に問う。ほぼ誰もが迷いなく返答できる。⑤「皆さんは「自然か自然でないか」を区別できましたが何をもちいて区別していましたか、たぶん「自然とは」は説明できないけど各自峻別できるということが今のワークでわかったでしょう」と解説。⑥なぜかは不明だが、自然の中で生活していた長い人類進化のなかでは自然でない不自然なもの、例えば枝の切り跡などは他部族が迫っているなど注意に値するものなので区別する能力が発達したのではないかと私は考えている、と紹介して終わる。このワークの発表は野外での実践ビデオ(10分)を見てもらいその後議論をおこなう。

このワークから以下のことが考えられる。

・人は「自然なもの」と「自然でないもの」とを教わることなく峻別できることから、無意識に理解できている。それは人類史の自然の中で長らく生活することで人に身についたものであろう。具体的には、「自然」という概念や言葉が生まれたときに、その反語である「自然でないもの」が生まれたと思われる。問題は、このワークが何歳の子どもから可能であるかだが、おそらく言葉がわかる幼稚園児であれば自然と自然でないものの区別は可能ではないかと思われる。それほど、この「自然」概念は強力なものなのではないだろうか。これはまた、本学会で議論になる「人の内的自然」という語の具体的な一例ではないだろうか。

・このワークの副産物として、自然と自然でないものの二区分以外に、周囲の「人」が見えているのに、それは自然と自然でないもののどちらにも区分していないことがわかったことである。これは、生物全般の特性である、同種のものをも本能的に見分けるという極めて強い能力によるものと思われる。人は他の生物種とはかなり異なるが、この同種を峻別するという能力もまた人が生物としての基本形を保持している一例といえるだろう。